

コミュニケーション手段の獲得
を目指して

実態

・対象児童 小学部

・行動観察

- 発音が不明瞭である。**年度当初は意味のある単語を時々話すことができる程度**である。
- 人なつっこく、自分から挨拶することができる。
- 日常的に使用頻度が高い言語指示はある程度理解できるが、どのような質問や指示に対しても、「はい」と返答することが多い。

指導目標

- (1) シールや色鉛筆等, 活動の中で自分が欲しい物を教員に指さし等で伝えることができる。
- (2) 教員の促しを受けて, トイレカードを教員に手渡したり, ジェスチャーでトイレに行きたいことを伝えることができる。

専門家からの助言

- 内言語は豊富だが、語彙（表出）が乏しいので、音声単語と絵とのマッチングで理解語彙を増やす必要がある。
- 音楽が好きなので、歌を使った練習も有効である
- 舌の機能が未熟で咀嚼が不十分なまま食べているので、スナック菓子等を使った咀嚼の練習が有効である。

指導の方法

- 2文字の名称カードを使用して、単語に合わせて手を叩きながら一音ずつ発音する練習を取り入れた。
- ことばでリズムあそびを取り入れて、「いちご」「めがね」などの練習を取り入れた。

結果

- 登校時や朝の会・帰りの会の時に、「おはようございます」や「さようなら」などのあいさつが、明瞭に聞き取れるようになり、相手に伝わりやすくなった。
- 年度当初は、明瞭に伝わる単語が、「はい」「ありがとう」等6語だったが、年度後半には、「せんせい」「おはようございます」等も加わり18語以上にまで増えており、最近では「トイレいく」など2語文の言葉も出るようになってきた。
- 休み時間、遊びたい玩具がある時に、指さしをして「ください」と言って教員に要求を伝えることができるようになってきた。

考察

- 児童本人が、相手に伝えたいと思えるような活動内容を提示し、言葉を発する機会が増えたことで、言葉のやりとりの増加に繋がったと考えられる。
- 児童は歌が好きで、休み時間に歌の絵本で遊んだり、対面学習で「絵描き歌」を取り入れたことも、語彙の増加に繋がったと考えられる。
- 「ください」と伝える方法を、言葉とジェスチャーで繰り返し、相手に伝える手段を獲得する事ができ、人との関わりが増え学校生活を送ることができている。

今後の課題

- 教員側が本人の伝えたい事を先読みしすぎず、できるだけ児童本人が言葉等で表出する機会を設定し練習を繰り返していく。
- 口腔の構音機能を高めるためにも、スナック菓子や堅い食べ物を食べたり、給食でよく噛むことを促したりして、咀嚼の機能を高める。
- 発音が不明瞭のため、伝える音声とジェスチャーでも伝えることで、相手に確実に伝えわるよう、表現手段を増やしていくことも必要と考えられる。